

塩田 始
×
藤岡孝雄
×
菊池省三

高知県のいの町
菊池学園の取り組み

菊池省三先生は、2016年度から高知県のいの町教育特使の任を委嘱され、年間およそ60日にわたって、いの町の進める地方創生総合戦略「心そだてる『みらいの町』推進事業」の教育分野における主要事業である「いの町 菊池学園」の推進をされています。2016年6月3日、事業がスタートして約2か月が経った段階で、塩田始いの町長と藤岡孝雄教育長、そして菊池先生による鼎談（意味：3人が向かい合って話をすること）が実現し、今後の教育改革の進む方向について、熱く語り合いました。

■いの町の目指す教育

塩田 いの町の課題を一言で言うとしたら、人口減にどのように対応するか、ということです。少子化が進んでいるわけですが、それは出産や育児に不安と悩みがあるということです。そうしたお母さんの不安に寄り添って、安心して出産・子育てができる町を創っていくというのがいの町の取り組みです。妊娠された方に母子手帳を交付したときから、保健師、保育士、看護師が総力を挙げてサポートをしていく体制をとっています。また、子育ての喜びや楽しみが実感できるように拠点事業として、子育て支援センターを開放するなどの取り組みをしてきました。これまでは、行政としてはそこまででした。今回、菊池先

生にお願いしているのは、その先の+αの部分です。子どもが自分自身の存在を誇りに思えるような人間に育っていけば、自ら考え、自ら行動し、いの町発展に貢献してくれるのではないかと考えています。そして、菊池先生の実践によって子どもが成長していく姿を通して、先生や保護者も変わっていくだろうと考えているのです。

藤岡 高知県が目指す学力向上の目標が達成できない背景として、教室の中で授業に向かい合えないお子さんが少なからずいるという状況があります。先生が変わることによって、児童・生徒との縦の関係ができれば、子ども同士が認め合う関係になり、お互いが連鎖し合って、教科の学力も向上していくでしょう。



学校が保護者や地域を変えていくことにもつながっていきます。当面の目標として、今年度は、学校の先生の教育観や意識を変えていただき、来年度は、保護者や地域に波及させていきたいと思っています。

菊池 これから先の長いスパンを見通したとき、まだ2か月しか経っていない状況ですが、教師が変わっていくことの難しさを感じつつも、同時に手応えも感じているという心境です。昨年何回か、いの町の学校で飛込授業をさせていただきました。その学校に今年も伺った際に、昨年授業をした子どもたちが、「あっ、菊池先生だ」と手を振ってくれたり、「サインしてください」と、あちこちで子どもたちから声をかけてもらったりしています。このことは、すごいことだと思うのです。たった1時間の授業です。そのことを覚えている子どもたちは立派だと思いますし、きっかけがあれば、子どもたちはぐんぐん変化し、成長するのです。そんな子どもたちの様子を見ながら、先生たちにも変化が表れてきていることを実感しています。先生方からいただく質問も具体的になってきました。

塩田 子どもたちは、心を求めていると思うのです。先生と子どもとの間に信頼があれば、



子どもたちはその居心地のよい環境の中で、落ち着いて学ぶことができます。私は、町長としての政策として、ずっと、子育て支援の充実と教育振興の町おこしを掲げています。それは、学力に限定しない人格形成という広い教育の目標を掲げて、将来のいの町を背負っていただける人を育てたいという強い思いがあるからです。

菊池 45分間や50分間の授業で、学びに向かい合えない子どもも含めて学力を上げなくてはいけないという課題と向き合い、何とかしようと四苦八苦されている実態が全国にあります。学校現場には対処療法が蔓延してしまっているのではないかと私は思うのです。熱心さは分かりますが、おおもとの部分、教育観の部分、中途半端な気がしてなりません。そこを変えられていないので、しんどさだけが増しているのです。

藤岡 例えば、「学力テストで平均点を上回るように」という指示がされると、対策を講じ、授業改善をし、指導案を作成するという、膨大な仕事が先生たちに回ってきます。先生たちはそれに集中せざるを得ない状況になって、夜遅くまで学校に残って仕事をして、次の朝は疲れが取れないままに子どもたちの前

に立ち、子どもたちはその先生の様子を見て笑顔が消えていくという悪循環になってしまっているのです。本来、先生が向き合わなくてはいけない子どもと向き合えないでいるのです。

■問われる教師の本気度

菊池 この事業がスタートして、各教室の中で先生たちは「ほめる」ことを始めてくれています。ただ、確かにほめてはいるけれど、その言葉が子どもに届いていないような教室もあります。届かないで、途中でストンと落ちてしまっているのです。今、教育長さんがおっしゃったように、元気で本気になってほめないと、子どもたちには届かないのです。今回の事業の中の特色ある取り組みとして、夜に自由参加で行っている「寺子屋」があります。ひざを交えてじっくりと学び合い、語り合う場です。平日の夜でけっして参加しやすいわけではないのですが、それでも欠かさずご参加いただいている先生も多くいらっしゃいます。参加されている先生たちに共通していることは、明るいし、元気ですし、学びへのいい意味での緊張感をもっているということです。各学校の教室を順番に見させていただいていますが、そのような姿勢で子どもたちに向き合っている先生は、やはり全然違います。先生の姿勢がそのまま反映されていると言ってよいと思います。

塩田 道徳教育、人権教育の大切さを思います。ある県立高校の校長先生が道徳を軸に学校を改革し、国立大学に進学する生徒を送り出すようになった事実があります。町内のある小学校の卒業式に参加させてもらったときに、子どもたちが「友達に大切にしてもらった。自分も友達を大切にしたい」という発表をしていました。私はその先生に「この学校は荒れていませんね」と言ったところ、すぐに「はい！」と自信のある声で嬉しそうな返



事が返ってきました。

菊池 私の教室では、それを「成長の授業」と言った子どもがいました。国語や算数を学んでも、本来は道徳性をもたなくてはいけないはず。「これを教えないといけない。これを理解させないといけない」という思いは、もちろん悪いことではありませんが、それが優先されてしまうことは、今の教室にそぐわないのではないかと思います。先日、ある県の中学校の校長先生とお話をしました。その県独自の学力テストの際に同時に行う質問用紙の中に「尊敬できる先生はいますか」という項目があったそうです。集計したところ、誰一人「はい」と答えた生徒がなくて、コメント欄にはたくさんの方が書かれていたとのことでした。それを見た先生たちは「1年間こんなに頑張ってきたのに、なぜ」と大変ショックを受けたと言うのです。子どもたちを見ることができている、読めていないという問題がそこにあると思います。今の学校の中で、教師の示す方向と子どもたちの望む方向がいかになぜかずれているかを、本気で見直す必要があるのではないのでしょうか。

藤岡 菊池先生が、先日、町内の小学校で飛込授業をされた際に、一人の児童の態度に対

いの町 菊池学園だより (平成 28年 7月)

菊池学園だより6月号で、「菊池省三先生の6月のいの町滞在期間は1日(木)～3日(金)・5日(日)の4日間でした」とお知らせしたのですが、その後、滞在の日程変更があり、6月30日(木)も来町していただきました。

それに伴って7月の予定も変更になりました。変更の理由は、7月7日(木)午後12時55分から放送された「まてなげテレビ特別(ごさんテレビ放送)『バイキング』」へのご出演が決まったがらでした。ご前になつた方もおられるかと思いますが、冒頭に櫻子の活動状況をお知らせした際に、「私はですね、例え**高知県のいの町という所があるんですけども、そこで、教育特使**。大分県中津市では教育スーパーアドバイザーという、そういう肩書きもいただいて、その地の学校の授業改善と関係に、全国の小学校、中学校を年間200ヶ所くらいです。授業をしたり、先生方と語り合ったりと、少し7月も先生の予定に当てはまっています。今、そういうことをしています。」と胸に「高知県にバッチ(第一報)」をつけて、「第一声で『いの町』のことを話してくださいました。同時に、桜町の会議室で「高知県町教育長役員会」が開催されていました。菊池先生は今年4月の「高知県町教育長役員会」で講演をされており、他町の教育長の皆様も菊池先生のことをご存じでしたので、桜町の職員と一緒に歓迎ご覧になりました。



7月5日(火) 吾北小学校(6年生)主催 公開授業(講師)いの町遊学推進地区協議会

菊池先生が授業の様子、年分分単元に訪れた先生が授業の様子、県分分単元に訪れた先生が授業の様子、そして、2台のカメラで撮影の様子。そんな日の中で、初めて菊池先生の授業を受けた吾北小学校の6年生13名。

Vol.3

子育てのまち、いの町

～ 子どもこそ未来 ～




菊池省三先生の教育特使として活動の様子は、「いの町 菊池学園だより」や「いの町PR映像」として、いの町のホームページで随時紹介されています。
いの町ホームページ <http://www.town.ino.kochi.jp/>

して厳しく指導をされたということをお聞きしました。ほめて寄り添う中でも、叱る必要のあるときには叱るということをされたとお聞きし、さすがだと思いました。

菊池 その授業の中で、「あなたは何が好きですか?」と聞き合うコミュニケーションゲームをしました。女の子が「国語は好きですか?」と訊いたら、相手の男の子は「ウルトラめちゃくちゃきらい」と答えました。そのときにクラスの担任の先生は、顔をしかめて負のオーラ全開で、その男の子を見ていました。教師が、子どもの言葉をそのまま額面どおりに受け取っていちいち態度に出しているのは、子どもも教室も変わりません。その様子を見て、私は、根底で子どもへの信頼がないと教師と子どもとの関係をつくることのできないということを改めて思いました。先生が考えを変えていくしかないのです。

塩田 人は叱られることで成長します。ただ、叱るだけではだめですね。ほめることでのフォローが必要です。

菊池 叱ることで、その子がこれまでのことを正したら、ほめてあげなくてはなりません。ある意味、ほめるために叱るようなものです。

今の状況では、私は基本的には1時間の授業で勝負をしなくてははいけません。ですから、叱ったままにしてそのまま帰るといふわけにはいきません。一般の先生方もその意識をもって年間200日の授業を考えてもらうとアプローチの仕方も変わってくるかなと思います。コミュニケーションゲームの話に戻りますが、相手の女の子が偉かったのは、その男の子に対して何を聞いたら「はい」と答えてくれるかを本当によく考えて質問を探していたことです。周りの子どもたちは、「はい」を20回ぐらい引き出していました、その子は4回でした。だけど、相手のことをいちばん考えながら質問をしていたのがよく分かりましたので、私は、たくさんほめました。

■教育改革の主体者は教師

藤岡 菊池先生のそんな授業に学びながら、そのクラスの担任の先生が変わりつつあるという報告が届いています。表情が明るくなってきたそうです。

菊池 まず教師が個とつながることが大切です。「そのために成長ノートを使いましょう」と言っているのです。成長ノートでつながりができてきた子どもたちの中の何人かが中心



になって、クラスの中の気になる子を変えていくこともできます。それができないまま、気になる子と対立していったら、まさに泥沼になります。私はシンプルに、「言葉を大切にしましょう。子どもとつながりましょう。子ども同士をつなぎましょう。授業を変えましょう」と言っているのです。

藤岡 寺子屋に参加された先生の反応は素晴らしいものです。参加された方から、まだ参加されていない方に広めていっていただきたいと思います。寺子屋の役割の一つは、忙しく仕事をして夜の9時まで学校にいるのなら、もっと時間を有意義に使おうと呼びかけることでもあります。皆勤賞の先生も時間が余っているから参加されているわけではありませんから。何のために教師をしているのかを先生たちが見つめ直す機会になるはずです。

菊池 「観」「論」「術」の中の「観」を変えない限り、「論」や「術」をいくら工夫したとしても限界があります。楽しいなと思える感性が問われますし、楽しいなと思える感性を呼び戻す取り組みでもあると思っています。

塩田 行政の世界で見ますと、普通新たな部署に異動になった人は、前任者と同じことをします。仕事ができすぎる人は、前任者の仕事をバッサバッサと切って、新しいことを提案して実行します。旧態依然では何も変わ

らないのです。その点は教員も同じだと思います。先輩に教えてもらったことはなかなか変えられないかもしれません。不安を感じたり、踏み出せないでいる人もいるかもしれませんが、今回は変わるきっかけであり、チャンスなのです。私の座右の銘というか仕事への取り組みの信条は、「企画はいつもしましょう。少し方向を変えて改善しましょう。だめなら180度変えて改革しましょう」というものです。今回の事業で言えば、菊池先生の指導で改善が進んだら、次は先生自身が自らの力で改革をしていただきたいのです。私はそれを期待しています。私は町の職員たちに「学校も変わりますから、行政も変わりますよ」と呼びかけています。

菊池 教育改革は、誰かがするものではなく、教師自らがするものですね。

【対談者紹介】

●塩田始（しおた・はじめ）

1950年、高知県生まれ。高知県立小津高校卒業後、高知県庁に入庁。2002年、伊野町長に当選。2004年、新設いの町長に当選し、現在に至る。

●藤岡孝雄（ふじおか・たかお）

1952年、高知県生まれ。近畿大学卒。大学卒業後、高知県旧伊野町役場に入庁。2013年、いの町教育長に就任し、現在に至る。